



妖怪ばぶみ★試し読み

意馬心猿

【妖怪ばぶみ】約三万文字、全編129P／本編123P 本来の話
 【スケベな夢気分】約七千文字、全編34P／本編28P 夢オチな話、家族も
 の設定（丑ママ、ポンとコンの二卵性の兄）

☆二作合わせて約三万七千文字、全編163P／本編151P ☆

主人公花賀 咲子（はが さきこ）

ブラック企業に勤める社畜

一人称・私

お相手1・丑ママ（ウシママ）

安心感のある巨体筋肉、巨根、雄っぱい、優しい味の母乳が出る、オネエ口調
 一人称・アタシ、ママ

お相手2 使いの者

こん狐だったり、ぽん狸だったり、少年、青年の姿をもつ

一人称・私

お相手3 鴉神(カラスガミ)

鴉、人型の姿をもつ

一人称・僕

お相手4 寅

金髪碧眼、少年から青年に変化する

一人称・オレ

- ★雄っぱい
- ★母乳
- ★放尿
- ★複数プレイ
- ★求婚
- ★干支
- ★使いの者(狐、狸)
- ★和風ファンタジー
- ★マニアック
- ★赤ちゃんプレイ
- ★ハート喘ぎ
- ★二穴責め
- ★逆ハーレム

女性側が赤ちゃんになったり色々なミルクを飲むよ！

今年の初作品はマイブームの雄っぱい母乳を入れました！
人を選ぶ作品です。気を付けてくださいね！

今年も、どうぞよろしくお願いいたします。

拝

一話目・丑ママ

教科書系素材を作っては作っては売りが落ちたことにより社長は部下を呼び出し、お前らの所為だと怒鳴りつける。ここは地獄かと思っていると切れた部下六名の男性方が改めなければ辞めると言い。社長は辞めろと言い。そして、人がいなくなり。本当の地獄は、ここから始まるのだと私は確信した。

事実、前も忙しく終電、終電と残業になつていた職場は終電ですら帰れなくなり仕方がないので朝、シャワーだけ浴びに帰るといふ訳の分からない事をして早や三ヶ月。何時寝てるのか寝てないのか。私ってなんだっけ。ロボット？ロボットに悪いか。もう、会社、明日出勤したら爆発してないかな。そんな事

を思いながら電車を下りて、ふと、足を止める。

「……えあ」

眠たさバリバリの頭は、どうやらイカレを湧き出してるらしい。

ああ。

寝なきや。

「お布団……」

家の方に足を向けようとして足を一步踏み出せずに辺りを見回す。

無人駅の電車から下りれば、そこはアパート群が密集する地味な街並みが広がっているはずだ。

だが、どうだろう。

暗い暗い深みをもった群青色の夜空の下。見えるのは洋館と和風が混ざった不思議な建物。

それが道の真ん中に道路という概念を潰すようにドーンと立っている。

「……おふとん」

眠い。

どうにか、ここから抜け出たくて曲がり角を探すが灰色の高い塀の先には知っているような地味な街並みがあるのに曲がり角が見当たらない。

キヨロキヨロ。

キヨロキヨロ。

あれれ。

どうした。

下り間違えたのか。

「眠いの……」

ならばと駅に向き直り後ろを見て首を傾げる。

なんとも遠い先に駅が見えた。

駅の入り口にはチエーンが、かけられているのも見え。その大きな看板の文字が『閉』と書いてあるのが見える。ショボショボする目で暗い夜空の下で、なんともハッキリと見え。終電は無いのだと物語っている。

「うそやん……」

「今晚は」

「へはっ！」

後ろから柔らかい明るい声が聴こえガバリと振り返り後ずさりながら確認すると、そこには何やら黒い鳥のような。

否。

鴉が一羽ポストのようなモノの上に。

「あ、れ……？」

おそるおそる鴉に近づく。

「お嬢さん、お疲れの様子だね」

「！」

近づいた中腰の体制で口をあんぐりと開いて身体が固まる。

「折角の可愛い顔も身体も台無しじゃないか」

「……か」

「可愛いお嬢さん」

「カラスが喋った！」

「おや」

「え！ え！ なに!? 頭良い！ カラスが頭良いって本当なんだ!? 凄い！」

「やばい！ 衝撃！」

「あははは！」

「わあ！ 笑い方がカアじゃない！」

何だか目が覚めてきた。凄い。動画撮りたい。

「お嬢さん、お嬢さん」

「へは」

鴉がふわっと飛び上がり私の中腰だった背中上に乗る。そして耳元で、カアではなく。

「可愛いお嬢さん。名は、なんというんだい？」

「え？ あ、花賀（はが）です……」

「下は？」

「……あー……下は……秘密です……」

「ふ、そうかい」

背を少し上げて、そう言うとき鴉は器用に私の背中から肩に足を乗せ背筋を伸ばしてもキチンと肩に乗っている。

「……カラス君は、頭がいいからね繰り返し語られると私は羞恥で死んでしま

うかもなので……」

「ほう？」

鴉が首を傾げ身を頬に擦り付けて声を出す。仕草の可愛いさに胸がきゅんとする。

「んー……カラス君の飼い主が、そこに住んでるのかなー……届ける序に、ここからの出方訊こう」

私も頬を鴉に摺り寄せて眠たい眼を我慢しつつ屋敷に近づく。

「綺麗で独特な建物ー……」

「好きかい？」

「あ、うん、好み」

「そりやあ良かった」

「ふふ、うん」

変わった建物というよりは屋敷。まるでTVで観る旅館のようだ。ただ和風

とは言い切れない、なんともハイカラな装飾で正直TVでも、こんなの観たことがない。鴉を肩に乗せたまま、あぐりと口を開けて幾つかある赤い門を潜っていく。

垂れ下がる色付きの太い編み込み糸に頭が当たりそうになるので頭を下げて避けつつ潜り抜け横引きの扉の前までやってきた。なんとも大きな玄関である。「手が汚れておるのう」

「え」

鴉がぼつりと言うもので自分の手の平を見ると、もやもやと黒い霧の様な汚れが見えた気がした。

「ほら、そこで洗うと良い」

そう鴉が片羽を広げて斜め後ろ先にある岩に囲まれた水場を促す。私は促されるまま、そちらに進み柄杓を右手に持った。

「神社みたい……」

湧き出ている綺麗な感覚がする水を左手にかけて右手にかけて右手で口をゆすいで柄杓を縦にして洗い終わる。終わると何だか身体が少し軽くなった気がした。

カラカラカラ。

後ろで音がして振り向くと玄関の扉が開いている。しかし人影は見えない。そつと近づいて軽くお辞儀をしつつ罪悪感から軽く両手を合わせて中を覗き込む。中は広い玄関で、玄関の奥にはまた大きな襖が見える。

「ご、ごめんください……」

しん……

静かだ。

「おうい。おうい」

鴉が翼を開いて飛び上がり屋敷の中へと入り込む。

「お客人だぞ。出迎えようじゃないか」

「えっ鴉さん……」

思わず一步を踏み出して届かない鴉に手を伸ばすが鴉は上にある太い縄紐を嘴で大きく突くと、その紐が眼前へ身を伸ばす様に落ちてきた。わあっと背筋を伸ばして紐を見上げればカラフルな鈴が沢山上に付いていて、ぼんやりと眺める。

「鳴らしてみな」

「良いんですか……？」

「それは呼び鈴だからね。呼ばなきや誰も気づきやしない」

「な、なるほど……し、失礼しますね」

頑丈そうな縄を手に取り鈴を鳴らす。

カランコロンカランコロン。

何とも耳奥に響く音がした。

「ほうら、おいでになった」

「え……」

前を見れば奥の大きな襖は開き中から作務衣姿の狐のお面を着けた少年が二人が立っていた。

☆☆☆

丑ママに抱えられて膝上に乗ったまま桶にすくった湯を狐面の二人に指先や

足先かけられた。蒸気が視界を奪い背中を丑ママに預けてハツとする。

「ふ、服を……あれ？」

見てみると私は服を着ておらず裸だった。ママも白い襦袢一枚で湯で濡れていく度に肌に張り付いて筋肉が浮き彫りになっていく。狐面の二人は白の褌一枚と赤の褌一枚の姿だ。

「足先から洗いましうぞ」

「手先から洗いましうぞ」

二人が私の足先や手先を洗いだし、それが揉みながらなので気持ちが良い。

「……もしかして夢なの？」

「よしよし。ママ達に任せなさいねえ」

丑ママが頭を撫でてくれるので頷いて身を任せる。安心と安定感のある大きなソファアーの上に座っている感覚だ。丑ママは私の横腹を撫で洗い。優しくへその穴を弄ってくる。

「……んうっ」

「気持ち良いかしら？」

「うん……気持ち良い……ママ……」

丑ママは私の耳元で優しく声をかけながら、お腹を撫で洗い胸下側から後ろに手を回し腰を揉み押しながら上へと向かう。ツボを、ぐつと押されながら進む、その指の動きは気持ち良く背中まで、ぐぐぐつと押し伸びると背筋が伸び、たまらず声が漏れ出た。

「ふあああ……っ、んっ、んうう……♡」

「んふふ。こつてゐるわねえ……♡」

ぐきゆりと身が音を鳴らし伸びて指圧される度に身が揺れる。裸体だが私は夢現で、これが現実だとは思えないからか無造作に揺れる自分の乳房が気にならない。

「ほーら全部、柔らかくしましょうねえ……♡」

「うん……♡」

耳元で囁かれ頷いて瞼を瞑り気持ち良さを堪能する。手と足も指、一本一本に狐面の二人の温かい手の平が通り奥まで揉まれながら進まれると身体は、ふにやふにやとなった。

ぺちゅ、ぺちゅ。

「うあ……♡ ひいん……♡」

両脇の間で、しつとりとした弾力のあるモノが動き甘く声が漏れ出る。その吸い付くモノが私の首筋を通り耳裏に来た時、乳房が揉まれた。

「あ……はっ♡」

「隅々まで綺麗にしましょうぞ」

「隅々まで柔らかくしましょうぞ」

若い声だ。あの狐面の二人の声が耳に囁かれたかと思うと音がヌメリと埋まった。温かい弾力のある湿気は、くちゆくちゆと耳奥から鳴り私の身を震わせる。

「……あ、あっ♡ はっ♡ うっ♡」

同時に乳房を大きな手が包み込み先っぽを指先平で柔らかく擦って私は自然と腰が揺れ動いた。

「あらあ♡ 悪戯な子ねえ……うふふ……」

お尻の割れ目に何か熱くて固いモノが挟まり腰が動いてしまう度に滑りが良くなって、ねちねちと肌から振動音が伝わってくる。

「んっ♡ んう?」

口の中に何かが入り込み驚いて瞼を開ければ狐面が視界に見えた。この距離で、この感覚。舌だ。キスを、しかもディープな方を何故かしている。仮面は鼻上までで鼻下は人肌だ。柔らかい若さ感じる肌の間から出て来た朱い舌は生物の如く動き回る。

「んうう♡ うう……♡」

止めたい気持ちが出て両手で押し返そうとしたが片側ずつ狐面の二人に手を取られて止められてしまった。

「私も、お口をしましょうぞ」

耳を舌で刺激し続けていた方が舌を抜き、そう呟く。すると片方が舌を抜き、くすくすと笑った。

「丑殿の、たっぷり飲まれたんですねえ」

暗に母乳の味が私の口からしたと言っていつて身が羞恥と混乱で震える。

「私も私も」

片側に頬を手の平で向けられて顔が近付き初々しい柔らかな唇から出た朱い舌が容赦なく口内へと入り込んだ。似た二人だが先程は混ぜるような舌使いだったのに比べ、こちら側は擦り付き密着させて動く舌使いだった。

「丑殿みたく私も出れば良いのですが……」

片側が筋肉はあるが雄っぱいには程遠い胸元に私の手の平を当て寂しそうに
眩く。

「……揉まれると大きくなるという俗世の話は、どうなのでしょうか……はあ
……♡」

私の手の平を動かして桃色の乳首に当てる為、その柔らかかった桃色は固さ
を見せ、ぷっくりと膨らんでコリコリ転がった。

「……んぐう♡ うう……っ♡」

下の子へしてしまった罪悪感で泣きそうになるが口は舌の絡まりで塞がれて
声は上手く出ない。鼻奥で呻くだけだ。その間、私自身、乳房を緩く揉まれな
がら乳首を弄られ続け股の間が、じんじんしてたまらない。

「そろそろ身体は流して髪を洗おうかしらね」

「んあ……♡ はふう……♡」

丑ママの言葉で舌が抜かれ手も外されて左右から木桶の湯が、ぱしやりぱしや

りとかけられる。

「……ま、ママ」

「んー？ どうしたのかしら？」

股の間が刺激を求め、つい、ここが磨けてないと言いそうになって身が朱く染まり頭を振った。いくら夢でも、そんな事は言えないと理性が私を止めたのだ。

「よ、呼んだだけ……」

「あらあ♡ 可愛いわね♡」

丑ママの方に身体は向けられて私は跨ぐように両脚を広げ膝上に座った。

「……あう♡」

すると丁度、割れ目の気持ち良い部分に固いモノが当たり蒸気で視界が悪い中、目を凝らす。

「御髪を綺麗にしましょうぞ」

「洗い忘れを確認しましょうぞ」

洗い忘れと聞いて言ってしまいたくなるが我慢だ我慢だと心の中で呟き。そして名案が思い付く。この視界の悪い蒸気の中で自分で腰を動かして刺激すれば良いのだ。

「……はぁ♡ はぁ♡」

興奮で息を荒くしながら、そつと腰を浮かばせて膨らみ刺激を求めて充血している陰核を固いモノへと押し付け小さく上下させた。

☆☆☆続きは本編で！ ☆☆☆

妖怪ばぶみ★試し読み

発行日 2022 年 1 月 30 日

著者 意馬心猿

<https://www.pixiv.net/member.php?id=8224911>

Generated by pixiv

本書を無許可で複写・複製することは、禁じられています。
